

時の容器が「はかり」に変わるとき

山 本 和 之

1. 本論文の目標

本稿(*)は、認知意味論の立場に立ち、期間を表す in の多義性を、「入れ物」としての容器と「はかり」としての容器との関係で捉えようとしたものである。時の長さを表す in については、瀬戸(2007)に、全体と部分という関係に基づく意味分析(終端焦点化)が提示されているが、本稿では容器の機能の違いに着目し、そこから入れ物(容器)と入る物(中身)の関係を、述語の表す事態の時間的継続性や仕切りに注目しながら考察していくという立場をとっている。

私達はさまざまな領域や入れ物の中に身を置いて生活し、またさまざまな領域や入れ物を利用して生活を送ってきた。時間も空間と同じようにいろいろな出来事が入る領域(容器)として理解してきた。この論文では、容器の持つ二つの機能に注目する。ひとつは、物を入れておく(収納する)機能、もうひとつは、容器に入れて容量を測る機能である。時間容器で言えば、前者はある出来事または事態がどの容器に入っているか、つまりいつのことを示し、後者はその出来事または事態が時間的にどのくらいの長さのものを示す機能である。本稿では前者を「入れ物」としての用法、後者を「はかり」としての用法と呼び、この二つの機能と出来事との関係を考察する。人間は昔から容器を物の収納場所としても、またどのくらいあるかを測る「はかり」とも利用してきた。基本は物を収納しておく場所としての用途であり、「はかり」としての用途は派生した用途であろうが、私達の生活の中で、「はかり」としての用途も重要な役割を担っている。

2. 語義と用例の考察：期間の仕切り点と期間の内容(「待機時間」「遂行時間」)

まず、下記(1)～(4)に主な用例を提示しておく。下記の用例は、主に日本の中学・高校

(*) この論文は、梅光学院大学大学院の授業において授業担当者と受講生が討論したことの中から生まれたものである。論文としての責任はすべて、論文の形にした執筆者(授業担当者)にあるが、自分の意見を述べ熱心に討論に参加してくれた院生の名前をここに記して感謝の意を表したい。金田友美、品川祐佳里、福本真弓、マレル由佳、村上栄子(五十音順)

英語教科書及び英米で出版されている辞書からの用例である。なお語義の立て方や用例の分類は辞書によって異なっており、以下の分け方も特定の辞書の分類に従ったものではない。

- (1) a. I cleaned my room in the morning.
b. In 1939, his remarkable career ended because of a disease.
c. We're going to Italy in April.
d. He believes food prices will go up in the future.
e. I was lucky that in my 10 short years as a court musician I was able to participate in many memorable ceremonies.
f. in my old age, in the last month, in winter, in her youth, in the nineteenth century in the week after Christmas, in the past year
- (2) a. The railway may reach this town in ten years or so, and the town's old, elegant atmosphere will be destroyed.
b. They'd pick me up again in a minute, they would!
c. I told him that in thirty years his ten thousand oaks would be magnificent.
d. Dinner will be ready in ten minutes.
e. She will graduate from school in three years.
f. I'll see you again in a month's time.¹
g. Ask again in three or four days.
h. This is me in ten years.
- (3) a. From Khabarovsk, which is one of the Trans-Siberian's first major stops, you will reach Moscow in six nights, or seven days.
b. And he does it in much less time than it took me to tell you about it!
c. Can you finish the joy in two weeks?
d. He walked two hundred and sixty miles in eight days.
e. The detective was able to solve the crime in one week.
f. She learned to drive in three weeks. / He was dead in a few seconds.
g. I came back from Oxford in ten days. / He wrote the book in a month.
h. In a few minutes he began to swim. / In a few minutes the flame went out.
- (4) a. I hadn't seen him in years.
b. It's the first / only letter I've had in 10 days.
c. She hasn't heard from him in six months.
d. This is the first cigarette that I've had in three years.

- e. It was the team's first win in eighteen months.
 f. I haven't enjoyed myself so much in years.
 g. It was the president's first public appearance in three months.

上記(1)は、「入れ物」としての in の例で、出来事がいつ起きたか(起きるか)を示している。(2)、(3)の例は、第5節で考察するように、「はかり」としての in の例で、(2)は、発話時(今)から見ての時間の長さを示す例、(3)は(2)以外、つまり期間の始めの仕切りが発話時(今)ではない例である。(4)は、否定辞や first, lastなどを伴う完了形の例である。OALD²で上記(1)に対応しているのは、語義3の <during a period of time> であるが、上記(2)と(3)は区分けされておらず、語義4(a) <after a specified length of time>のもとにひとつに纏められている。上記(4)は、OALDの語義4(b) <(used after a negative or first, last, etc) for a period of time> に対応している。CIDE³では、上記(1)の用例が語義 **DURING** during part or all of a period of time の下に置かれるのは OALDと同じであるが、さらに上記(4)のような例もそこに挙げられている。上記(2)の例は、CIDEでは語義 **BEFORE THE END** before or at the end of (a period)⁴の下に、上記(3)の例は、(3h)を除いて、語義 **NO MORE THAN** needing or using no more time than の下に置かれることになると思われる。

ここで、(2)と(3)の例について、期間を測るときの基準点、期間の内容、動詞の時制という点から少し考察しておきたい。(2)と(3)の in は、ある事態が発生するにしろ、完結するにせよ、その時点までの時間の長さを表す用法である。その点に注目すれば、OALDのように、<4(a) after a specified length of time> の語義のもとに、ひとつに纏めることができる。そのさい、ある事態の生起について、その事態が発生するまでの時間をどこから測り始めるかという始めの仕切りに注目すると、発話時(今)を基準にして測るものと、そうでないものに分かれる。本稿の(2)は前者の、(3)は後者の例である。これに対して、in が示している時間は一体何の時間を表しているのかという期間の内容に視点を置いて区分けすることもできる。(2)の、発話時からその事態が発生するまでにかかる時間は、いわば発生までの待ち受け時間のようなものなので、これを「待機時間」と呼ぶことにする。これに対して(3)の例は、(3h)⁵を除いて、その行為が始まってから終了までどれくらいかかるか(かかったか)という実行に要する時間を表している。この後者のような時間を「遂行時間」と呼ぶことにする。なお(3h)は、過去のある基準時からのその事態が発生するまでの時間を表しているので、「待機時間」の例である。従って、もし「待機時間」か「遂行時間」かという期間の内容に視点を置いて語義・用例を区分けすれば、(3h)のような例は(2)の例と一緒にになる。但しその時は、期間の始めの仕切りが発話時とは限らず、過去のある基準時の場合も一緒になることになる。こ

らの区分けは、先程挙げた *CIDE* の行き方と重なると思われる。なお、「待機時間」か「遂行時間」という区別は、動詞の種類によっては、明確に区分けできない場合もある。これは後ほど第4節で考察する。

最後に、(2)、(3)の区分けと動詞の時制との関係について述べておきたい。(2)の、inが発話時からの期間を表す例では、当然時制は未来時制となる。(3)の「遂行時間」の例は、確かにその多くの例が過去時制になっているが、(3a)、(3b)、(3c)のように、現在形や推量の will の例も稀ではない。辞書⁶で、< [過去形や過去完了形、現在完了形と共に、過去の期間の終点を指して] …… (の間) で 《◆期間の終点 (過去の時点) で成し遂げたこと・ある結果に至ったことを表す：主に成し遂げるのに要した時間を表すのに用いる》 > と注記してあるものもあるが、時制の制限については注意を要する。この辞書で期間の終点を表すもう一つのグループは [未来形と共に、通例現在を始点とする未来の期間の終点を指して] となっているので、これは本稿の(2)に対応している。過去完了形や現在完了形の例については、後ほど第6節、第7節で扱う。

3. 述語が持つ内在的仕切り：述語の分類

時間容器に事態を入れる場合、どんな物でも入れられるというわけではない。特に、その事態がどういう仕切り(境界)を持っているかということと関係が生じてくる。容器に入れるには、入る内容物に、それに合うような仕切りが必要だからである。たとえば、resemble のような、それが表す事態に仕切りのない動詞は、(5)が示すように、容器には入りにくい。なお、同じ状態動詞でも、好みは変わることがあるので、(6)のように、容器に入れることも可能になる。

(5) *He will resemble / resembled his father in May.

(6) I like ice cream in (the) summer.

本稿で取り上げている構文には、上で触れたように、述語が表す出来事・行為の時間的仕切りが関係しているので、この節ではそれが時間容器の機能とどのように関わっているかを動詞(句)の種類ごとに見ていくことにする。下の動詞(句)の分類は Vendler (1967) を基にしたものである。

- 1 瞬時的に終わる動きを表す動詞 (瞬時動詞)
wink, shoot, kick a ball, explode, stand up, slap her face
- 2 動きや変化の終了点を表す動詞 (達成動詞)

reach the summit, arrive at, die, become a teacher, finish, land

3 動作の遂行や結果を表す動詞（完成動詞）

draw a circle, dig a hole, build a house, make wine, run a mile, write a letter

4 同種の動作の反復・継続を表す動詞（反復動詞）

swim, walk, push the cart, talk with someone, knit, smoke, eat

5 状態を表す動詞（状態動詞）

resemble, expect, doubt, include, have, depend on, love, respect, wish

上記は、事態の継続性と終了点に視点をおいて述語を分類したものであるが、同じ瞬時動詞でも、その行為に要する時間の幅が同一でないように、各グループに属する成員がまったく同一の性質を持っているわけではない。以下、述語の種類間の統語的振舞いの違いを簡単に述べておくと、同じ動詞がふたつの類に関わる場合があることはあらかじめお断わりしておく（例：dig a tunnel <行為の終了点（終わりの仕切り）がある：完成動詞>、dig the ground <行為の終了点（終わりの仕切り）がない：反復動詞>）。まず、5の動詞（句）は進行形が出来ない点で1～4の動詞（句）と区別される（用例（7）、（8））。次に1～4の動詞（句）については、4は期間を表すfor前置詞句が可能なのに対して、1～3の動詞（句）には付けられない（用例（9）、（10））。残る1～3では、1の動詞（句）は動作の時間的長さを尋ねることは普通でないが、2、3では可能である（用例（11）、（12））。最後に、2の動詞（句）は開始や終了を示す表現を付加することはできないが、3の動詞（句）は可能である（用例（13）、（14））。

(7) *Tom is resembling his father.

(8) Tom is winking / reaching the summit / drawing a circle / swimming.

(9) Tom swam for ten minutes.

(10) *Tom stood up / reached the summit / ran a mile for ten minutes.

(11) *How long did it take to wink?

(12) How long did it take to reach the summit / to build the house?

(13) *Tom began to reach the summit.

(14) Tom began to draw a circle.

4. 動詞（句）の持つ内在的仕切りと容器の「はかり」機能との関係

この節では上の述語の分類とinの語義との関係を見ていくことにする。具体的には、動詞の表す事態がどのような仕切り（境界）をもっているか、そのことと容器の機能とはどのような関

係にあるか、とくに「遂行時間」「待機時間」との対応関係を考察する。容器はどんな述語のときでも「はかり」として機能できるわけではないし、また何の時間を測るかも述語の仕切りのあり方と関係を持つからである。

ある事態の生起を認識するには、始めの仕切りにしろ、終わりの仕切りにしろ、あるいは両者が同時的であるにしろ、仕切り（境界）が必要である。そこから言えることは、仕切り付けを示さない状態動詞は、そもそも容器には入りにくいのである。in の（1）の語義（ある大きさの特定容器を示す）と共存しにくいことはすでに述べた。期間の長さを表す（2）、（3）の in と当然相性が悪い。生起する事態に仕切りがなければ、それが始まるまでの時間であれ（「待機時間」の場合）、終わるまでの時間であれ（「遂行時間」の場合）、長さを測ることはできない。（15）は「待機時間」読み、（16）は「遂行時間」読みが意図されている。

(15) *He will keep standing in ten minutes.

(16) *He closely resembled his father in a few minutes.

4 の反復動詞は、5 の状態動詞と同じように、一見仕切りがないように思えるが、動作・行為である分だけ、状態に比較して仕切りがつけやすい。状態はいつその状態になり、いつその状態が終わったと言えるのか判断がつきにくいのが、反復動詞は目に見える動作なので、最初の動作の開始と、動作の終了は明確に分かる。反復動詞で、始めの仕切り（動作の開始）と終わりの仕切り（動作の終了）のうちどちらの方により関心をもつかと言えば、それは始めの仕切りである。人はこれからどういう動作を取るか（どういう動作を開始するか）に強い関心を持つからである。smoke で言えば、吸い始めの仕切りであって、吸い終わりの仕切りではない。そうすると始めの仕切りを利用して、下例（17）のように、「待機時間」を表す in と使うことができることになる。⁷ 但し、動作・行為が達成されたことを示す終わりの仕切りはないので、（18）が示すように「遂行時間」 in とは相容れない。なお、下例の swim は泳ぐという動作を表しているが、これにゴールを表す to the shore が付くと（swim back to the shore）、終わりの仕切り（ゴール）が明示されるので、「遂行時間」の in と共起可能となる。

(17) Tom will smoke / swim / talk with Mary in a few minutes.

(18) *Tom smoked / swam / talked with Mary in a few minutes. <「遂行時間」読み>

反復動詞は、動作の開始と終了のあるひとかたまりの活動を表すので、次例のように、当然「入れ物」としての容器に入りうる。

(19) He smoked / swam / talked with Mary in the morning.

次に、上記分類 3 の完成動詞を見てみよう。なお、動詞の表す事態に何らかの区切りがあれば、「入れ物」容器の in (in の (1) の意義) に入れられることにはあまり問題がないので(従ってこれから考察する完成動詞、達成動詞、瞬時動詞いずれも「入れ物」容器の in と共起できるので)、以下では動詞のもつ区切りと「待機時間」「遂行時間」との関係だけを見ていくことにする。下例 (20)、(21) は完成動詞が期間の長さを表す in と使われている例である。

(20) He will build a house in two months / will run a mile in four minutes.

(21) He built the house in two months / ran a mile in four minutes.

完成動詞は動作の結果として何かが出来上がることを表す動詞である。この類の特徴は、完成(終わり)までに時間を要することと、終わりの仕切りが明確なことである。そうすると、このグループの動詞が期間の in をとると、そのひとつの意味は、その行為の開始(始めの仕切り)から完成(終わりの仕切り)までにかかった「遂行時間」を表わすことになる。上例で言えば、家を建てる(1マイル走る)のにかかる(かかった)時間である(will は推量の意味)。それと同時に、(20)については、in を発話時から事態発生までの「待機時間」(「二ヶ月(後に)」「4分(後に)」)の意味に取ることも可能である(そのときは will は未来の意味)。(20) は曖昧な文である。⁸

次に上記分類 2 の達成動詞の例 (22)、(23) を見てみよう。

(22) He will reach the summit in two hours. / The helicopter will land in a minute.

(23) He reached the summit in two hours. / The helicopter landed in a minute.

達成動詞は、上述の完成動詞と違って、事態の終了点(終わりの仕切り)のみ前景化されていて、途中の経過は背景化されている。したがって、進行形にしたときは(The helicopter was landing.)、近接未来「間もなく」を表す。事態の終了点までの途中経過は背景化されていても、それを排除しているわけではないので、(12)のように、終了までにかかった時間を尋ねることは可能である。そうすると、達成動詞と用いられた in は、達成時点(終わりの仕切り)までの時間の長さ(「遂行時間」)を表すと言える。しかし、終了点のみに焦点を合わせれば、途中は背景化し空白となるので、「待機時間」を表すとも言える。(22)の例や、He'll be back in a few minutesなどで、頂上に到達するまで(帰ってくるまで)にかかる時間(「遂行時間」)であ

るとも言えるし、同時に、到着という事態が発生するまでの待ち時間（「待機時間」）であるとも言えるのではないだろうか。

最後に瞬時動詞を見てみる。瞬時動詞は、始めと終わりの仕切りが同時的である、つまり時間を要しない動詞であるから、in の表す期間は、事態の完成や達成までにかかった時間を表すことはできない。従って、瞬時動詞が期間の長さを表す in と用いられれば、未来形の場合は発話時からその行為や事態が生起するまでの時間、過去形の場合は、文脈から明らかな過去のある時点からその事態が起きるまでの「待機時間」を表す。

(24) The bomb will explode in a few minutes.

(25) In a few minutes the bomb exploded.

以上、in のどの意味になるかが、動詞（句）の種類、つまり動詞（句）の表す事態の仕切りのあり方に大きく関係していることを見てきた。次に、次節では、in 自体の機能に焦点を置いて考察を進めることにする。

5. 「入れ物」としての容器と「はかり」としての容器：何が入るのか、何を測るのか

用例提示のところで挙げた（1）の in は、出来事や事態がどの容器に入っているか、つまりいつのことかを示す用法であり、in 前置詞句はどの入れ物か分かるように区別的な名前で示されている。特別の区別的な名前を持たない場合でも、記述的にそれがどの入れ物が区別できるようになっている。出来事・事態の生起する時間領域（容器）を指定しているわけであるから、容器の違いが前景化され、ほかの容器との区別が行われていると言ってよい。大きさの決まった特定容器と言ってもよい。これに対して（2）、（3）の in 前置詞句は、容器（領域）の大きさ（長さ）を表して、ほかの大きさ（長さ）の容器（領域）と区別して用いられている。（1）の前置詞句は、いわば既存の容器を表示しているのに対して、（2）の in は、あとで述べるように、その場に依りて作成した容器を、その大きさ（長さ）で表示していると言える。その意味では、容器の大きさが前景化していると言える。

ここで素朴な疑問がわく。通常、in が表す容器はその中に入るものが存在している。それでは時の長さを表す in 容器には何が入っているのだろうか。下の（26）～（28）を見ていただきたい。（26）の in は「特定容器」の例、（27）は「待機時間」の例、（28）は「遂行時間」の例である。

(26) I started working here in 1994.

(27) Ask again in three or four days.

(28) He walked two hundred and sixty miles in eight days.

(26) では、「ここで働き始める」という出来事が容器「1994年」に入る内容物であるが、それでは(27)では、何が内容物に当たるのだろうか。容器の一方の端(始端部)は話者の発話時である。もう一方の端(終端部)は、それから3、4日後で、その時点で再度尋ねることを求めている。確かに、ある期間の終わったところで尋ねるといふ出来事が発生するのであるから、それだけを見れば終端焦点で説明できるように思われる。しかし尋ねるといふ行為がその期間(容器)に入る内容であるかという、疑問がわく。もしその期間内(3、4日以内)に尋ねるのであったら、(26)の場合と同じように、尋ねるといふ出来事はその期間に入る内容物ということが出来るが、尋ねるといふ行為は当該の期間が終わったときに生じる事態で、通常の意味での内容物ではない。もし内容物ではないと捉えれば、(27)、(28)のような例に対して、終端焦点による説明では充分でないように思う。

瀬戸(2007)は、項目 in のところで、期間の終わる時点を表す in について、全体で部分を表すメトニミーとして、次のように注記している。

「これは、end-focus point (終端焦点)の意義である。たとえば、over の意義に経路を表す「……を越えて」と経路の終端を表す「……を越えた所に」があるのと同じ。→ across, over」

over の意味拡張・多義性については、Dewell (1994) の分析がよく知られている。Dewell は、(29)に見られるような over の中心的・典型的意味を半円形のイメージ・スキーマで捉え、(30)、(31)、(32)を、それぞれ半円形経路の中央部、下降する後半部、経路の終端部がプロファイルされた事例とした。

(29) The dog jumped over the fence.

(30) The plane flew over the hill.

(31) Sam fell over the cliff.

(32) Sam lives over the hill.

(29) ~ (31) では、over の経路を移動しているのは主語の名詞句である。(32)において丘を越えているのは、話者の主観的な目線であるが、半円形経路の終端部だけに焦点を置いて見れば、あたかもサムが越えたかのようにサムが存在する。つまり(32)も、他の事例の半円形経路と同じ半円形経路に使って説明ができるのである。瀬戸(2007)の挙げている例は以下の例であ

るが、(26) ~ (28) の例と同種の例なので、本稿の例によって議論を進めることにする。

(33) I'll call you in a week. / "I'll be back in a minute, Mama, wait on me!" / The degree should be completed in two years.

私達は、期間の in に関しては、上に紹介した見方とは違う立場を取っている。その根拠は主に次の三点である。まず、(26) と (27)、(28) とでは容器の機能が違って、(26) のような特定容器の終端焦点化から (27)、(28) の用法は生まれてこないことである。二つ目は、(28) のような例では、260 マイル歩くという全体の行為が 8 日間かかったという意味で、到着した終わりの部分だけに焦点があるわけではない。これは前掲 (3f) の例でも同じで、in は、車を運転できるようになるまでにかかった時間を示していて、期間全体（「はかり」としての容器全体）が前景化していると考えられる。三つ目は、動詞の表す事態は、すでに触れたように、容器に入る出来事とは思われないことである。

まず一点目であるが、入れ物としての容器とはかりとしての容器は機能が異なるので、(27) の前置詞句を特定容器に置き換えても (Ask me again in September.)、その期間の終わりに、という読み方は生じない。つまり、特定容器の終端部に焦点を置いて、その期間が終わったら、という読み方をすることはできない。(29) ~ (32) の over の場合は、同じイメージ・スキーマの焦点場所の違いで説明できたが、in の場合はそうはいかないのである。次に二点目であるが、(28) のような「遂行時間」を表す場合、もし終端焦点で事態を捉えれば、「八日目（の終わり）」には「八日間」のような見方になり、かかった日数全体を表示した「八日間で」のような言い方にはならないのではないだろうか。終端部焦点による説明は、期間の終わりのところである事態が生じるというその点だけに注目し、期間が何を表すかということを経験化してしまっただけに生じた説明のように思われる。何かの大きさ（長さ）を測ろうとすれば、当然のことながら、その何かには、始めと終わりの仕切りがないと測れない。私達の見方では、動詞の表している出来事は、「遂行時間」「待機時間」の終わりの仕切りであって、内容物ではない。最後の三点目であるが、私達は、例えば (3f)、(28) を例に取れば、車の運転が出来るようになる、260 マイル歩く、という事態にどれくらいの時間を要したか、時間容器に入れて測ると、それぞれ 3 週間、8 日間という大きさ（長さ）の容器に入る、という捉え方をしているのである。そのような捉え方が、文全体の意味にも合致しているように思われる。おそらくここで、(27) については、具体的には何を測っているのだという疑問が生じるであろう。しかしこれも、出来事が起きるまでの待機時間を時間容器に入れて測ると、ちょうど 3 日（ないしは 4 日）という大きさの容器に入る、従って 3、4 日後にその出来事が起きる、と捉えることができるのである。待機時間においても時間は経過していく。その時間を内容物として測っているのである。私達の捉え方では、車

の運転を習い始めてから運転できるまでの全行程が3週間という大きさの容器に入るもの、歩き始めてから260マイル歩くまでの全行程が8日間という大きさの容器に入るもの、再び尋ねるまでの期間全体が3日（または4日）という大きさの容器に入るもの、そういうイメージで捉えるのである。したがって、終端焦点という説明にはならないのである。

6. 過去向きの「待機時間」

最後に上記(4)の例について述べておく。(4)は、not や first などを持つ完了相の文に現れる in の例である。(4e, g) では完了形は形の上では現れてないが、意味的には完了形の文に等しい。(4)の in は、いずれも「待機時間」を表す in の例である。(4d)の例で言えば、前回煙草を吸ってから、今回煙草を吸うまでの空白時間を表している。その期間の一方の端は、煙草を吸った今の時点で、もう一方の端は前回煙草を吸った過去の時点で、その間の空白時間（「待機時間」）を時間容器で測れば3年という長さになるのである。これは、過去完了の文においても同じで、(4a)の文では、過去のある時点から前回彼に会った時点までの「待機時間」（彼に会ってない期間）を時間容器で測ると数年間の長さになるのである。(4)の文は、(2)および(3h)が発話時（今）または過去のある時点を中心とした未来方向への「待機時間」を表しているのに対して、ある事態が生じている今または過去のある時点を中心とした過去方向への「待機時間」を表していると言えるのではないだろうか。ある基準点を起点にして未来方向を見るか、過去方向をみるかの違いなのである。

7. 「入れ物」容器と「はかり」容器の混合型

入れ物としての容器とはかりとしての容器は、同じ物の機能であるから、当然のことながら、どちらとも取れるような事態が生じてくる。前節で扱った(4)の例は、空白時間であることを示す first や not を持つ完了形の文であった。同じ完了形の文でも、そうした標識を持たない例を見てみよう。

(34) In the last few minutes we have received reports of an explosion on board an oil tanker.

(35) In 12 years, she is recorded to have completed 21 single crossings,....

(36) Ernie had suffered two heart attacks in the space of a week.

いずれの例も、(4)の例と異なって「待機時間」を表わすものではない。そうすると、これ

らの in は、出来事の入る特定容器、つまりその出来事がいつのことかを示す機能を持つのか、それとも出来事の「遂行時間」を表す機能を持つのか、ということになるが、そのどちらの機能も持っているのではないだろうか。(34) を例に取れば、現在完了であることから、in the last few minutes が今を基準点とした過去方向への数分であることが分かる。つまり出来事の発生時が特定できるので、入れ物としての容器の機能を持っている。それと同時に、爆発の報告を複数個受けるのに要した時間（一種の「遂行時間」）を表しているとも言えるように思う。つまり「はかり」としての容器の機能も持っていると言える。(35) も同様で、「この 12 年間」は、21 回の単独横断を行うのに要した時間であると同時に、それがいつの 12 年であるかも示している。(36) の in the space of a week は、心臓発作を 2 度起こすに至った時間（「遂行時間」）を示しているが、同時に、過去完了によって、その 1 週間が過去の基準時から遡っての一週間であることを示しているので、入れ物がどの入れ物か分かるという意味で、特定容器としての機能も帯びていると言えるのではないだろうか。

8. おわりに

本稿では、容器における「入れ物」から「はかり」への機能変化に対応して、時間容器に入る内容も「出来事」の場合と「時間」の場合が生じているのではないか、そういう捉え方を基盤に置いて議論を進めてきた。議論の過程の中で、「入れ物」容器が「はかり」容器として機能するには、述語の表す事態の継続性や区切りのあり方が関与していることを見てきた。人間の身体的経験の中で容器との関係は非常に深くまた多面的であるだけに、いろいろな捉え方が可能になる。本稿の捉え方もそのような捉え方のひとつとして位置づけていただきたい。

注

1. Swan (2005) の 82 (6) に、in...’s time は本稿でいう「遂行時間」の方には使えないという解説がある。
2. *Oxford Advanced Learner’s Dictionary* (1995)
3. *Cambridge International Dictionary of English* (1995)
4. (2) の in の意味に、before or at the end of a period と before を入れている点でこの辞書は特異である。実際にはその期間内に当該の出来事が生じることはあり得る。
5. (3 h) の例で、in 前置詞句が文頭にあるのは、過去時の基準点を示す文がこの文より前にあり、その基準点からの「待機時間」を示しているからである。同僚の米人インフォーマントによると、後置した場合は in ではなく after を使うということであった。began がある方がない文よりも自然なのは、これから行為を始める場合と違って、過去の行為はすでに終了しているので、始めの仕切りへの意識が強くないためであろう。
6. 『ジーニアス英和辞典』(2006)

7. 過去形の「空白時間」については、注5を参照のこと。
8. 同僚米人インフォーマントで確認。

引用文献

- Crowther, J. (Editor) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford University Press.
- Dewell, R. B. (1994) "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis," *Cognitive Linguistics* 5.
- 小西友七・南出康世（編集主幹）（2006）『ジーニアス英和辞典（第4版）』大修館書店
- Procter, P. (Editor-in-chief) (1995) *Cambridge International Dictionary of English*, Cambridge University Press.
- 瀬戸賢一（編集主幹）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage* (Third Edition), Oxford University Press.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.